

## 水の都〈蘇州〉と版画



「姑蘇城外錦堆を成す、商賈肩摩し雲集し来る、窮るは是れ南濠繁盛の地、万年橋上登台に似たり、虹は晋江に跨り真に大観、謳歌道に載す万民の歡、康衢鼓腹す承平の日、賦税先づ輸し考槃を楽しむ」

これはここに写真をお見せする「姑蘇万年橋図」の上部にある賛文です。江南の水の都蘇州は清時代に商業都市として繁栄し、伝統に束縛されない市民的な文化を生き育てました。日本の大阪に似たこのような庶民の街に生まれ、康熙・乾隆の世と言われる清王朝の極盛期に栄えたのが蘇州版画です。

それは版画としてはかなり大画面のものが多く、墨刷に色版や手彩色を加えて、華やかに彩られています。日本の浮世絵のように、美人画、花鳥画、風景画などがありますが、大てい年画として作られ、売られたものです。年画は中

国の庶民が新年を祝うために門口や室内に貼ったり、飾ったりして楽しんだものです。蘇州版画はすぐれた庶民芸術ですが、元来消耗品であったので、中国本土にはほとんど残っていませんが、江戸時代に日本に沢山輸入されましたので、わが国には数多く現存しています。

蘇州版画の中でも鑑賞画として興味深いのは、風景画ですが、「姑蘇万年橋図」はその代表作です。乾隆5年（1740）に石造りの立派な万年橋が蘇州にできたとき、市民たちはその壮大な景観に驚き、大平の世を祝いました。この版画は万年橋を中心にして、水の都蘇州のにぎわいを写したものです。

木版に筆彩色を加えた版画ですが、その頃中国に輸入されていた西洋銅版画の影響を受けて、精密な細い線を用い、陰影法と遠近法もとりにいられています。このような西洋影響の蘇州版画は、江戸時代の日本の浮世絵版画、写生画、洋風画などに強い刺戟を与えました。



季刊 美のたより No.20

昭和47年4月1日

発行 大和文華館